露天風呂 盗撮 NO!!

景観が魅力の露天風呂。「対策は簡単ではない」と頭を悩ませる県温泉協会の定居康夫会長＝東伊豆町稲取で

静岡県警が、県内外の露天風呂の入浴客を狙った盗撮犯を立て続けに摘発している。犯人らは、100㍍以上離れた山中に潜み、望遠レンズ付きのカメラを用いて撮影するなど巧妙な手口で犯行を繰り返していた。県警は施設側に対策を促すが、露天風呂の売りである景観を遮ったり、人手や設備投資の負担が重くのしかかったりするため、県内の温泉業者は対策に頭を悩ませている。

（足達優人）

県警 相次ぎ摘発

「昔は館内で『のぞき』はあっても、外から撮影されるとの認識はなかった」。県温泉協会の定居康夫会長（七四）は驚きを隠せない。

昨年十月、藤枝署は、山中で露天風呂を盗撮する際、邪魔な木々を切るために使うノコギリを所持していた男を銃刀法違反の疑いで逮捕。これをきっかけに盗撮動画の撮影や販売、盗撮の依頼をした男ら十人を次々に逮捕した。犯行現場は、北海道や岐阜、兵庫県など全国に及んでいたことが捜査で判明した。

撮影に用いられたのは望遠レンズ付きのビデオカメラやスマートフォン。近隣の山中から二百、三百㍍先の露天風呂へ向け、撮影を繰り返した。隣接する宿泊施設の部屋からの犯行もあった。

県警は被害を防ごうと、七月に静岡県温泉協会の会員施設を対象に防犯講話を開催。山道入り口への防犯カメラ設置や露天風呂の塀を高くすること、撮影可能な距離にある山の定期的な巡回など、過去の事例から防犯効果の見込まれる取り組みを紹介し、対策を講じるよう求めた。

しかし、県東部で温泉旅館六施設を経営する定居会長は「（対策は）実際は難しいと思う」と胸中を明かす。露天風呂の魅力の一つは浴場から見える景観だ。「景色が良いということは、裏を返せば相手からも見えやすい」。外から見えないよう塀を高くすることは、魅力を損なうことにもつながる。

巡回といっても範囲は広い。定居会長は「自分が所有する土地は社員が巡回できるが、二百、三百㍍離れた場所は他人の土地もある」と頭を悩ませる。

金銭面でも厳しい。定居会長の旅館では盗犯防止も兼ねて館内外に防犯カメラを設置しているが、費用は一施設約二百五十万円と負担も大きい。「各旅館だけで全ての対策はできない。山の防犯カメラは行政が設置して、注意を促す表札を立てるなど、支援してもらいたい」と求めた。

ライト照射、センサー…対策あの手この手

困難とも思える露天風呂の盗撮対策だが、独自の方法で取り組む施設もある。

南伊豆町の「石花海（せのうみ）　別邸　かぎや」では、温泉近くにある崖側に発光ダイオード（LED）ライトを照射し、逆光にして盗撮を防いでいる。

群馬県草津町の「草津温泉　西の河原露天風呂」では、露天風呂の女湯を見下ろせる崖部分に、町に依頼して高さ二㍍ほどの柵を立ててもらった。加えて施設独自で、柵付近に人感センサーを設置。センサーの反応は事務所で確認できるという。

ただ、対策には人手もお金も必要。盗撮対策に詳しい「全国盗撮犯罪防止ネットワーク」（和歌山市）の平松直哉代表は「温泉では公衆浴場法に基づき、タオルを湯船に漬けてはいけない。法改正でタオルや水着を着用できるようにするべきだ」と提案する。

「『タオルを巻くよう促すと盗撮される施設だと思われかねない』という施設側の声もあるが、利用者の安心を守ることが本当の信用につながる」と語った。

警察や全国盗撮犯罪防止ネットワークが推奨する対策

1. 山林の出入り口などへの防犯カメラの設置
2. 館内の不審者や施設駐車場の車両のチェック
3. 撮影の恐れがある山林などの巡回
4. タオルや水着の着用（法改正が必要か）

盗撮グループの犯行

崖側に向けて設置されたライト。夜間に照射し逆光にすることで盗撮を防ぐ＝南伊豆町の「石花海　別邸　かぎや」で（定居会長提供）